女性会連盟１００周年に向けて

日本福音ルーテル女性会連盟は、2028 年に 100 周年を迎えます。そこで、女性会連盟 26 期役員会ではこれまで日本のキリスト教宣教の為に心身を惜しんで尽くして頂いた先生方を、５回に渡って紹介したいと思います。最初に、日本伝道の為に初の女性宣教師となられ、日本の女子教育に貢献されたマーサ・Ｂ・エカード先生を紹介致します。

マーサ・Ｂ・エカード宣教師を訪ねて

■生い立ち

マーサ・ブジョン（B）・エカード先生は、1887 年４月 17 日にアメリカ合衆国テネシー州で、父アベルと母アイダの次女として生まれました。エカード先生が生まれた頃、日本では明治 20 年を迎え、欧米諸国から色々な知識を導入していました。又、アメリカ南部のルーテル教会では、日本伝道が決定されています。

エカード先生の母親は、牧師一家に育ち、父親も熱心なクリスチャンでしたので、愛情溢れるクリスチャン家庭で育ちました。両親は、子ども達の躾において「恵まれない人びとに親切を施すこと」「日々の仕事をきちんと果たすこと」「神により与えられた任務を全うすること」と掲げていました。幼いエカード先生は両親の教えを身に着けていきましたが、13 歳の時、母と父を相次いで亡くします。しかし、父方の祖母が高齢であったにも関わらず、孫達の面倒を見ることで、エカード先生は悲しみを乗り越え、勉学に励みました。

当時は女子でもめずらしいカレッジに通い、日本のことが色々書かれていた「タイディングス」という雑誌の記事を読み、宣教師となって日本で働きたいという強い希望を抱くようになりました。

■日本での伝道

エカード先生は、1913（大正

２）年に日本伝道の召命を受け、1914（大正３）年にサンフランシスコから船に乗って、横浜に到着しました。その時 26 歳でした。日本では２年課程日本語学習を習得して、九州の佐賀市の佐賀幼稚園に１年間勤務した後、福岡市に移り、1917（大正６）年には南博幼稚園園長として奉仕することになりました。その頃博多では、宣教活動の一環として英語夜間学校が教会で開かれていました。エカード先生は昼間は園長、夜は英語講師，時には女性達に料理も教え、忙しく充実した日々を過ごしました。

1921 年（大正 10 年）４月、34 歳を迎えるこの年、久留米市の日善幼稚園園長も兼任することになりました。このように３つの幼稚園に勤務したことやその業績が認められ、日本幼稚園連盟の九州支部長、連盟長に選ばれ、２度も栄誉を受けました。

■女子学校設立

1921（大正 10）年にアメリカでは、「日本に女子学校を設立」というルーテル教会の教会員の希望で献金が捧げられるようになりました。それ以前に 1911（明治 44）年に設立された九州学院（男子校）が刺激になったことは言うまでもありません。さらに、女子学校設立の願望は、日本で伝道活動を行っている女性宣教師達からも湧き上がっていました。

1922（大正 11）年、熊本において、女子学校設立の議決がなされ、準備の推進委員が選ばれ、エカード先生と九州学院で英語を教えていた村上二郎先生が直接の責任を負うことになりました。その頃アメリカでは「女子学校設立」のために 17 万５千ドルが決議され募金活動が開始されました。わずか２年間の募金期間で 30 万人の賛同者から、はるかに上回る 25 万６千ドル以上の金額が寄付されました（1923 年の５ドルは、2005 年の日本円で５万円の価値があり、25 億６千万円あまりとなる）驚くばかりの金額です。

こうして、熊本の地で女子学校設立の準備が本格的に始まりました。日本ルーテル教会では熊本市外の室園の高台に１万 600 余坪の敷地を選定し、建物は九州における高等女学校中の最大且つ最新式の校舎になりました。次にエカード先生と村上先生は教師探しで苦労されました。

1926（大正 15）年に九州女学院として開校しました。エカード院長、村上主事（教頭）は「愛と光に恵まれた婦人を」をモット―に、男子の中学校と

殆ど同程度の教科書を採用していくことにしました。そして４月に70名の入学者を迎えてスタートしました。

■戦争から戦後へ

順調に歩み出している女子学校にも徐々に、戦争の気配が感じられるようになりました。とうとう1941（昭和16）年にエカード先生は長崎から本国に帰国されました。戦争が終わったその年、教頭の江藤先生がエカード先生に手紙を送り、それを読んだ先生は、翌1946(昭和21)年にやっとの思いで、日本に戻ってこられました。その年の12月には５年ぶりにクリスマス礼拝とキリスト降誕劇が行われました。

学校では、６・３・３制が導入されました。校名も戦時中に変更させられた清水高等女学校から九州女学院に戻りました。そして中学校が設立され、翌年に高等学校が誕生ました。

■他の施設との交流

その頃、エカード先生は関節炎を患いながら、チャペルでの礼拝や聖書の授業、そして教会の奉仕に加えて在校生や卒業生を連れてハンセン病の患者の慰問によく出かけられました。「ハンセン病患者の母」と評されるハンナ・リデル氏が建設したハンセン病患者のための療養施設「回春病院」は学校から徒歩で10分足らずのところにありました。九州ＭＴＬ（救ライ協会）が設立されると同時に理事にもなられ、又、同じルーテル教会の後輩パウラス先生が園長の社会福祉施設「慈愛園」の理事もされました。

■九州女学院に終止符

エカード先生は1955(昭和30)年６月に長年の教育活動に終止符を打ち、学校を後にされました。熊本駅には600名を超す見送りの人々が集まり、讃美歌「また会う日まで」の大合唱が起こり、列車は動き出しました。

エカード先生は1969（昭和44）年５月、ワシントンＤ．Ｃ．のルーテル老人ホームで静かに神のもとに召されました。同年６月に九州女学院で、エカード先生の追悼記念式が院長・江藤安純先生のもとに行われ、チャペルは卒業生たちでうめつくされました。最後にパウラス先生が「死は神の尊い贈り物である」と追悼の辞を述べて終わりました。

■現在の学校

九州女学院は名称を改め、九州ルーテル学院となりました。そして、男女共学になり、幼稚園、中学校、高校、大学、インターナショナルスクールも設立されています。又、２年後には100周年を迎えます。エカード先生の精神が引き継がれ、今の時代に合った学校教育、運営がなされているのです。

長い歴史を引き継ぐ九州ルーテル学院は、これからも神様のお守り、お恵みの中で発展してほしいと願っています。

（まとめ26期役員会）

本稿は参考文献に従って表記しています

参考文献
青山静子　『マーサ・B・エカードの冒険』ドメス出版　2006年
九州女学院（現九州ルーテル学院）『九州女学院の50年』九州女学院1976年
熊日新聞（家族史研究会）『近代熊本の女たち』熊本日日新聞社1981年

第一回婦人会会議　熊本